〔研究ノート〕

鏡神社の「楊柳観音像」をめぐって

梅　山　秀　幸

【昨年（2013年）２月，佐賀大学で行われた研究会に参加したおり，時間つぶしに訪れた佐賀県立博物館でたまたま展示されていた唐津の鏡神社所蔵の「楊柳観音像」を見ることができた。その優婉な美しさとともに，何よりもその大きさに驚かされた。その後，韓国の友人の画家がこれを復元模写をしたいというので，わたくしがその交渉を引き受けたが，現今の韓国と日本の古美術をめぐる情勢は厳しく，実現にこぎつけることができなかった。その間，この高麗仏画の傑作について，文献を調べながら考えていたことを，論文の体裁をなさない「研究ノート」としてこの場を借りて披瀝したいと思う】

一，「こま」の紙の伝統

『源氏物語』の「藤裏葉」の巻，光源氏が自分の娘の明石の姫君を東宮と結婚させようとして，その入内の準備に取り掛かる。後宮で他の女性たちと競争して東宮，ひいては後の天皇の寵愛を得るためには，女性として最高の教養を積まなくてはならない。季節に応じて風物を織り込んだ和歌を作り，それを墨継ぎもあざやかに選び抜いた紙に美しく書く，それは平安朝の宮廷に生きる女性として最も重要な教養である。その手本を作って

キーワード：高麗仏画，華厳経，観音菩薩，こま（高麗），普陀山

嫁入り道具の一つとして娘に持たせようと，光源氏は考える（以下，『源氏物語』の原文は玉上琢彌『源氏物語評釈』（角川書店）による）。

こまの紙のうすやうだちたるが，せめてなまめかしきを，「この物ごのみする若き人々こころみむ」とて，宰相の中将，式部卿の宮の兵衛の督，内の大殿の頭の中将などに，「あしでうたゑを，思ひ思ひに書け」と宣たまへば，みな心々にいどむべかめり。

（こまの紙の薄様風で，非常に優雅なのを，「あの風流な若い人たちを試してみよう」と考えて，宰相の中将，式部卿の宮の兵衛の督，内大臣家の頭の中将などに，「葦手や歌絵を，各自思い通りに書け」とおっしゃるので，皆それぞれに工夫して競争するらしい）

葦手というのは文字を絵画の輪郭の一部に使ったものであり，歌絵は文字通り歌の作られた場面を描いたものである。季節の移り変わりの中で男女が情愛を歌を介して交わし合う。そうした遊戯を含んだ文字であり絵画でもある芸術の手本の作成を当時の風流な貴公子の三人に依頼したことになるが，そのために光源氏はわざわざ「こま」から渡来した紙を使った。その「こま」の紙は薄く，非常に優雅であったとあるが，姫君の嫁入り道具の冊子には最適な紙だったことになる。

その少し後の文章では，光源氏自身が手本として書いた冊子を，訪ねて来た弟の兵部卿と見る場面がある。

書きたまへる冊子どもも，隠したまふべきならねば，取う出たまひて，かたみに御覧ず。唐の紙のいとすくみたるに，草かきたまへる，すぐれてめでたし，と見たまふに，こまの紙の，はだこまかになごうなつかし

きが，色などははなやかならで，なまめきたるに，おほどかなる女手の，うるはしう心とゞめて書きたまへる，たとふべきかたなし。見たまふ人の涙さへ，水茎に流れそふこゝちして，あく世あるまじきに，またこゝの紙屋の色紙の色あひはなやかなるに，乱れたる草の歌を，筆にまかせて乱れ書きたまへる，見所かぎりなし。しどろもどろに愛敬づき，見まほしければ，さらに残りどもに目も見やりたまはず。

（お書きになった何冊かの冊子も，お隠しなさるべきものではないから，お取り出しになって，お互いに御覧になる。唐の紙のごく硬いのに，草をお書きになったのが，まことに結構である，と拝見なさると，こまの紙の，きめが細やかで，柔らかく親しみ深いのが，色ははでではなくて，やさしい感じがするのに，おっとりした女手を，きっちりと気をつけてお書きになったのは，喩えようもない。御覧になる宮の涙までが，筆跡に沿ってこぼれて行く感じがして，見飽きるときもなさそうだが，また国産の紙屋院の色紙の色合いがはでなのに，乱れ書きの草の歌を，筆の向くまま散らし書きなさったのが，見あきることがない。しどろに乱れて愛敬があり，いつまでも見ていたいものだから，他の物には目もおやりにならない）

唐の紙は「いとすくみたる（硬い）」とあり，また日本の紙屋の紙は「色あひはなやかなる（色合いがはで）」と簡単に書かれているのに対して，こまの紙については「はだこまかになごうなつかしきが，色などははなやかならで，なまめきたるに（きめが細やかで，柔らかく親しみ深いのが，色ははでではなくて，やさしい感じがする）」と実に長々とその紙の性質を書いている。そしてその美しい紙に調和するように，光源氏は女手，つまり仮名文字を心をこめて書いていて，それを見た弟の兵部卿は涙すら流して感動したというくらい，文字と紙が調和した美しい芸術だったという

のである。

さらに，先に若い貴公子たちに托した「こま」の紙の冊子について，特に光源氏の息子の夕霧の作品についての批評がある。

葦手の冊子どもぞ，心々にはかなうをかしき，宰相の中将のは，水のいきほひゆたかに書きなし，そゝけたる葦の生ひざまなど，なにはの浦にかよひて，こなたかなたいき交りて，いたうすみたる所あり。また，いといかめしうひきかへて，文字やう，石などのたゝずまひ，好みかきたまへるひらもあめり。「目も及ばず，これはいとまいりぬべきものかな」と興じめでたまふ。なにごとも物ごのみし，えんがりおはする親王にて，いといみじうめできこえたまふ。

（葦手の冊子類が，思い思いで何となく面白い。宰相の中将のは，水の流れの勢をたっぷりと書き上げ，乱れ立っている葦の生え具合など，難波の浦に似ていて，葦と文字と入り交じって，まことにすっきりした所がある。またいかめしく，書風をかえて，字体，石などの様子を，風流にお書きの紙面もあるようだ。「すばらしい。これは時間がかかりそうなことですな」と，面白がっておほめになる。何事にも趣味を持ち，風流がりなさる親王で，たいへんにおほめ申しあげなさる）

仮名文字の成立は和風文化の成立を意味し，またやまと絵の描線にその仮名を用いる葦手もきわめて日本的な視覚芸術である。それは日本独自のものであるといってよいかもしれないが，そのとき使用するのには「こま」の紙が最適であったというのがおもしろい。少なくとも『源氏物語』の中の，光源氏の認識はそうである。『源氏物語』は以後の文化の規範となり，その美意識は後世に大きな影響を与え続けたと考えるとき，『源氏物語』

よりも百五十年ほどは下ることになるものの，葦手の典型と考えられる厳島神社にある国宝の「平家納経」の一部の見返りの絵はどのような紙に書かれているのであろうか。源氏の美意識を踏襲するとしたら，「こま」の紙以外には考えられないようにも思う。小松茂美氏は古筆学の大家であり，その絵巻物の研究においても多大な恩恵を受け，常に尊敬の念を抱き続けている学者なのだが，その大部の『平家納経の研究』（講談社）ではかなり多くの紙面を紙の研究に割かれている。しかし，残念なことに実は和紙のさまざまな種類について列挙して説明されているだけで，他国から輸入された紙の使用については言及されていない。平家が日宋貿易を盛んに行ったという事実から，宋の紙を多用したという見解があってもおかしくはないのだが，それについてもいわれていない。平安時代の古筆は貴重な文化財として日本には数多く残されているが，その中に「こま」の紙がかなりあるのではなかろうか。機会があれば，私の今後の研究課題としたいし，専門家のお話しをうかがいたいものと思っている。また，『源氏物語』に書かれている「こま」の紙の印象は現在の韓国で伝承されている韓紙のイメージとずいぶん違うようにも思う。千年以上前の「こまの紙」は韓国のどこかに保存されているのだろうか。

ところで，「こま」とはどの国を指すのであろうか。まずは百済（くだら）・新羅（しらぎ）・高句麗（こま）の三国が鼎立した時代の高句麗であり，またその古地に統一新羅の時代を挟んで後に起こった高麗を，日本では「こま」と呼んだ。そして靺鞨を糾合してその間に起こった渤海も，太祖・大祚永は高句麗の遺民を称しており，日本でもそれは承認されていた。そこで，

高句麗→渤海→高麗

と，長い断絶を挟むことなく，「こま」は続いたことになる。高句麗が668年にほろびるものの，渤海が698年に建国され，926年に耶律阿保機によってほろぼされる。しかし，すでに918年には王建が高麗を建国して，936年には韓半島を統一することになる。

『源氏物語』において，音楽について述べる場合，「こま楽」は古い時代に伝わった高句麗の音楽であり，その後に伝わった渤海の音楽も含まれることになる。そして，物語の展開においてははなはだ重要な役割を担うことになる，まだ子どもであった光源氏の将来を占う人相見に長けた「こまうど」については，渤海の人だと考えられる。このことについては，本居宣長が『玉の小櫛』の中で，

> 延喜のころ参れるは，みな渤海国の使にて，高麗にあらざれども，渤海も，高麗の末なれば，皇国にては，もといひなれたまゝに，こまといへりし也（延喜の時代にやって来たのはみな渤海国の使いであり，高（句）麗の使いではないけれど，渤海も高句麗の末裔であるので，日本では以前の呼称のままに「こま」というのである）（『本居宣長著作集　巻四』（筑摩書房）

といっている通りである。『源氏物語』はそれが書かれた西暦1000年頃から考えると，過去の宮廷をイメージした歴史小説の趣をもっている。そこで，物語自体の中に数十年の時間の流れがあるとしても，延喜（901～923）のころを物語の発端と考えればいいことになる。『源氏物語』の中には渤海との交流を物語る事物がいくつか登場する。光源氏の愛人の一人である常陸の宮の娘の末摘花は父親から譲られた皮衣を着こんでいた。それが一時代遅れたファッションセンスだとしていささか滑稽に語られるのだが，これは貂の毛皮であり，かつて渤海から盛んに輸入されて平安貴

族のあいだで珍重されたものであったことが他の記録からもわかる。しかし，残念ながら，渤海の紙の輸入について特に記載された記録はない。『源氏物語』の中で「こまの紙」が出て来るのは，すでに光源氏の晩年であり，物語の発端からはすでに四十年ほどが経過している。とすれば，こちらの「こま」は高麗であると，論理的には考えてもいいことになる。

いずれにしろ，「こま」の伝統の中に，文様の入った薄い優れた紙を作る技術があったと考えていい。考えて見れば，日本に紙を作る技術をもたらしたのも，610年に高句麗からやって来た曇徴によってであった。

さて，以上の「こまの紙」は鏡神社の「楊柳観音像」のはるか以前の時代のものであって，また絹本である「楊柳観音像」とは直接には関係がない。ただ，私自身はこれまでずっと「こま」の文化の伝統について，北方騎馬民族の健やかで雄々しい男性的な性格をイメージしていたのだが，最近になって，『源氏物語』の「こまの紙」の言及に初めて気づき，極めて繊細で優美な女性的な性格をもったものとして日本の知識人たちに評価されていたのだと思い知らされることになった。そうした「こま」の文化の伝統に，仏教受容の成熟が加わって，当時の政治的な混乱の中にあって，頽廃へ陥るすれすれの線で留まって，優婉きわまりない傑作の「楊柳観音像」が製作されたことになる。

二，鏡神社の「楊柳観音像」―淑妃金氏のこと―

さて，鏡神社の「楊柳観音像」については，寄進銘が残っていて，明徳二年（1391）に僧の良賢によって鏡神社に寄進された事情がわかる。当初はその製作の経緯を語る紀年銘があったとされるが，それが切断されたらしく，現在は残っていない。しかし，日本国中をくまなく回って正確に測量して日本地図を作った伊能忠敬の『壬申　測量日記』（文化九年　1812）

に，幸いなことに，当時はあった紀年銘が写し取られていた（以下，「楊柳観音像」についての情報は李泰永氏「鏡神社所蔵高麗仏画『楊柳観音像』の発願者と日本将来について」（『福岡大学人文論叢』42巻４号）による）。

宝物　楊柳観音像画一幅　長一丈八尺　横九尺　一枚画絹
画成至大三年五月日願主王叔妃画師内班従事金裕文翰画
直待詔季桂同林順同宋連色員外中郎崔昇等四人
（自至大三年距文化九年壬申五百〇三年）

これによって，至大三年（1310）の五月にこの画が完成されたことがまずわかる。その願主は「王叔妃」であるが，実際に作画にかかわったのは，画師内班従事の金裕をはじめとして，文翰画直待詔の季（李か）桂，林順，宋連，そして色員外中郎の崔昇の四人であったことになる。至大三年から文化九年までは五百〇三年だというのは伊能忠敬の注記であるが，この「〇」の使い方に正確な測量にこだわった彼の性格が現れていて面白い。

ところが，「王叔妃」の解釈は，研究者によってさまざまである。「叔」は「淑」で，サンズイは五百年の歳月で消えて読みとれなかったのであろうが，願主は「王と淑妃」の二人なのか，「王の淑妃」の一人なのか，という問題がある。後述するように，この当時，王は高麗には不在であり，その後もずっと帰って来なかったから，遠くから王命を受けたということがあったとしても，またそれを金氏が主張したとしても，制作主体は「王の淑妃」の金氏一人であると，わたくしは考えている。

追及していくと，高麗王朝の後宮のありようはまことに複雑極まりない。王家にとって宗廟社稷を維持し治めることが最重要な課題であるとすれば，王は多くの女性とかかわって世継ぎをまずは確保することが仕事となる。多くの女性たちが王に侍する後宮にはそこに集う女性たちのあいだの嫉妬，

その背後の親族の利害打算が働いて魑魅魍魎のうごめく世界となる。そのあり方は高麗王朝と朝鮮王朝とでまったく別ではないはずなのだが，この時代の高麗の場合，後宮では絶対的に首位の位置に立たなければならない，おそらく気位の人一倍高い元の皇室から降嫁した公主がいて，事態はさらにこみいってくる。ただしかし，貞節であることを女性に（だけ）おしつける儒教の受容によって，朝鮮王朝ではけっして許容されなくなることが高麗王朝では許容される。モラルにおいておおらかなのである。

わたくしはかつて今は亡き河合隼雄氏と対談をしたことがある。朝鮮王朝の女流文学である『癸丑日記』·『仁顕王后伝』·『閑中録』などの話をしながら，儒教の浸透した社会で，女性はあくまで貞節であり続けなければならず，理想的な女性のありようは一夫に仕えて家政も巧みに取り仕切る女性である旨を話したことがある。これらの作品の中心人物である仁穆王后も仁顕王后も政争の中で苦労を重ねなくてはならなかったが，いかに貞淑で立派に身を処したか。恵慶宮洪氏も早く夫を失いながらも，陰謀の渦巻く宮廷社会の中で立派にわが身を処して，わが子と孫，すなわち正祖と純祖を王位につけたのであった。これらの女性が朝鮮の女性の理想像であるが，ひるがえって，日本の『源氏物語』にはさまざまな女性が登場するが，もっとも理想的な女性として描かれるのは，藤壺の中宮ということになる。ありていにいえば，夫がいながら，その息子と姦通し，その子を身籠って産んだ女性である。しかも皇室での出来事であるから，その不倫の子どもが天皇になることになる。紫式部も思い切ったことを書いたものだが，座談ではいつもユーモアをお忘れにならない河合隼雄先生は，日本では不倫ぐらいしなければ，理想的な女性じゃないのですよと，おっしゃったものであった。半ばは冗談であり，半ばは本気の発言である。

実をいうと，本居宣長も同じようなことをいっている。人は「もののあはれ」を知らねばならない。「もののあはれ」というのは深い心の動きで

ある。人の心が動くのは何よりも恋愛においてである。恋愛において人は，つらいこともかなしいことも，うらめしいことも腹立たしいことも，おかしいこともうれしいことも体験する。そこで，人が「もののあはれ」を体験するには恋をするのがいちばんであり，しかも，道ならざる恋の方が，いっそうもののあわれに深みを与えることになる。さほど深い心をもっていない男女のあいだでも不義の恋にはあわれさが加わるものであるが，心深い男女同士のあいだの道ならぬ恋はひとしお類なくもののあわれなものとなる。光源氏と藤壺，柏木と女三宮の不義の恋の物語は『源氏物語』の中でももっとも生彩を放っている。朝鮮朱子学の影響もあって，儒教的な倫理感に縛られた江戸時代に，本居宣長の考え方はなんとも破天荒なものといえる。

……なぜ，このような話をするのか，実は鏡神社の「楊柳観音像」にも同じような因縁がつきまとうからである。

『高麗史』巻八十九列伝二にこの淑妃金氏のことが見える。忠宣王の妃としてではなく，実はその父の忠烈王の妃としてである。

淑昌院妃金氏，尉衛尹致仕の良鑑の女なり。姿色あり。かつて進士の崔文に嫁し，早く寡となる。斉国公主薨ず。忠宣，世子たり。幸姫無比の寵を専らにするを疾ひ，これを斬る。忠烈の意を慰解せんと欲し，金氏をもってこれを納れ，後に淑昌院妃に封ず。忠烈薨じ，忠宣は殯殿に祭る。遂に妃の兄の金文衍の家に幸し，妃と相対して時を移す。人始めてこれを訝る。後，十余日，文衍の家に移御して蒸す。いまだ幾ばくならずして淑妃に進封す。妃は日夜百態して妖しく媚び，王はこれに惑ひて親しく聴政せず。遂に命じて，八関会を止む。元の皇太后，使ひを遣はして妃に姑姑を賜ふ。姑姑は蒙古の婦人の冠の名なり。時に，王の寵は皇太后にあり。故にこれを請ひ，妃は姑姑を戴く。元の使ひを宴する

に，宰枢以下，幣を用ひて妃を賀す。かつて四月八日をもって燈を後園に張り，火を山に設け，絃管を具して，もってみずから娯しむ。その黄簾・繍幕みな供御の物にして，観る者は市の如し。三日して乃ち罷む。妃かつて居するに憂ひなく，邀えて宰枢を宴す。又，銀字院に如きて，法会を設け，宰枢また與にす。時に王は元に在り，妃，あるいは元使を宴し，あるいは朴淵に遊ぶ。或いは寺院に如きて，僧を飯し，出入に度無く，車服衣仗，公主と異なることなし。

金氏は「姿色あり」という，大変に美しい女性だったにちがいない。初めに進士の崔文という人と結婚したが，夫が死んで若くして寡婦となった。元の世祖フビライの娘として高麗の王に降嫁した斉国公主フルトロケリミシル（1256～1297）が死んで，忠烈王は最愛の妻を失った悲しみからというよりも，強大な背景をもつ強い妻が死んでやっと手に入れた自由さからか，幸姫無比に耽溺した。そこには目に余るものがあったので，世子であった忠宣王が無比を殺したのである。忠宣王は，その罪滅ぼしということか，父親に美しい金氏をあてがった。やがて忠烈王が死んで，金氏はふたたび寡婦となった。その美しさを充分に知っていた忠宣王はこの金氏を放っておかなかった。まだ夫の喪中であった金氏をまだ父の喪中であった忠宣王がものにする。金氏は「日夜百態して妖しく媚び」，そのとりこになった忠宣王は即位早々にもかかわらず，政治になど興味を示さず，国家としても最重要な八関会を中止したのだという。忠宣王はモンゴルでの生活が長く，モンゴルの皇太后の寵愛を得てもいたので，皇太后に頼んで，モンゴルの高位の婦人がいただく「姑姑」の冠を金氏のために送ってもらったのだという。状況はやや異なるとしても，父と息子の二人と通じた姿色のすぐれた女性という点で，藤壺と淑妃金氏は同じである。

忠宣王は高麗にいるよりも，モンゴルで過ごすことを望んだ王であった。

1298年に王となって，後宮のトラブルからすぐに譲位し，1308年７月の忠烈王の死後，ふたたび王位についたものの，高麗でしたことといえば，11月の国家としては大事な八関会も忘れるほどに父親の妃であった淑妃金氏との閨事にふけっただけであり，翌年の正月にはすでに元京にいて，その後は一生のあいだ高麗に帰ることはなかった。しかし，金氏は一人高麗に残されても，王妃としての生活を楽しんだ。十分すぎるほどに楽しんだようである。忠烈王は金氏に夢中になって八関会を廃したが，忠烈王が元にいて留守のあいだも，金氏は後園に灯りを点し，管絃の演奏をもさせ，４月８日の燃燈会の方は楽しんだのである。見物の者が市を成したというから盛大なものであった。「その黄簾・繡幕みな供御の物にして」というのは，黄簾・繡幕の中には供御の物が満ち満ちたということであろうが，「供御の物」とは仏に対するお供えというよりも，金氏に贈られた賄賂なのであろうか。さらに，一人の生活を楽しんで宴をもよおし，銀字院でも宴を催し，寺院に出かけては僧たちに食事を与えた。「宰枢を宴す」「宰枢また與にす」というのはどういう意味なのであろうか。夫の忠宣王がいないので，王の代わりのように宰枢をもてなしたということであろうか。あるいは，特定の宰枢がいて，それとの密通をいうのではないかとも思われる。いずれにしろ，その振る舞いには法度がなく，その生活の豪奢さは公主同然だったというのである。ここでいう公主同然の豪奢さというのは高麗王の娘の公主のそれというよりも，元の皇帝の娘の公主のそれをいうのであろうか。

しかし，この文章を額面通りには受け取ってはいけないであろう。『高麗史』は朝鮮時代の文宗元年（1551）になった。編集代表者である鄭麟趾を初めとする朝鮮時代の儒者たち，世宗のもとで育った集賢殿の秀才たちの文章はまことにすばらしいのだが，女性を見る目にはつねに儒者の色眼鏡がかかっている。父親と息子の両者と通じた女性を評価することなど，

儒教の倫理で凝り固まった彼らには到底できないのである。自由に生きようとする女性に対して悪意に満ち満ちたものになる。鏡神社の「楊柳観音像」の優婉さと深遠さを考えるとき，その製作主体である淑妃金氏の精神性は朝鮮時代の集賢殿の儒者たちが決して達することのできない豊かさと高みにあるといわざるを得ないのだが。

三，鏡神社の「楊柳観音像」―忠宣王のこと―

鏡神社の「楊柳観音像」は「至大三年五月」に製作されたと，伊能忠敬のメモした銘文にはあった。『高麗史』をひもとくと，至大三年（1310）の正月，忠宣王はすでに元にいて，もう二度と高麗本国に戻ることはないのだが，「王，世子に伝位せんと欲し」とあって，世子の鑑に譲位しようとしている。もう王位に留まること自体に興味を失っていたようなのである。「楊柳観音像」の製作された５月の条を次に列挙する。

夏五月甲申，元の丞相脱脱，使を遣はし，来って，閹人・童女を求む。

辛卯，帝，瀋陽路の官吏に命じて，瀋陽の奏請を隔越するを得ることなからしめ，違えば理罪す。

乙巳，王，世子の鑑およびその従者の金重義らを殺す。

ここに，「楊柳観音像」の製作の動機を探る直接的な手がかりがあるわけではないし，書かれていることの意味を正確に理解できるわけではないが，当時の時代のありようが凝縮して現れているようにも思われる。元の貴族たちは高麗の美しい宦官と少女たちを愛し，自分たちの身の回りに置くことを好み，彼らを元の都に送るように求めているのである。高麗王は瀋陽王でもあった。瀋陽の官吏たちに瀋陽王の奏上を妨げることのないように，元の皇帝が命じている。「瀋陽王」というのは名ばかりの称号では

なく，高麗王の忠宣王は実際に瀋陽を統治していたのである。そして，なんと，正月には譲位しようとまでしていた世子の鑑を，同じ年の５月にはその従者の金重義とともに殺したのである。その理由については記載がなく，まったくわからない。

忠宣王がどのような人であったか，わたくしが韓国の歴史上の人物を調べる際にいつもまず最初に当たってみるのは，李弘稙博士編『国史大事典』（三栄出版社　1984）である。それを引用してみる。

忠宣王　1275（忠烈王１）～1314（忠粛王１）　高麗26代の王。在位1298，1308～1313。諱は璋，初諱は謜，字は仲昂，蒙古名はイジルブガ（益知礼普化），忠烈王の長男で母親は斉国大長公主，正妃は元の晋王の甘麻剌の娘の薊国大長公主（宝塔実憐公主）。1277年（忠烈王３）世子に冊封され，翌年には蒙古に行き，蒙古名を賜った。1296年，蒙古皇室の晋王甘麻剌の娘の宝塔実憐公主を正室に迎え，元都（北京）で婚儀を挙行したが，それ以前に，西原侯瑛・洪文系・趙仁規の娘などを妃としていた。1297年，母親が急病で死ぬと，元から帰国して，母が病を得たのは内寵を妬んだ者たちの所業だとして，当時，父王の寵を頼んで驕っていた無比（伯也丹）と彼の関連者たちを帰郷，あるいは死刑に処した。この出来事と王妃の死に大いに衝撃を受けた忠烈王は王位の移譲の意志を元に伝えた。そこで，1298年，忠宣王が王位に昇って，父王は太上王となった。若い王は旧弊を改革して新しい政治実行しようとしたが，権門・勢家の批判を浴びた。政局の刷新をはかって官制の改革を行おうとしたとき，趙妃を嫉妬してきた王妃の薊国大長公主と王の反対派たちによって，陰謀事件が起こった。そこで，忠宣王の一次即位は７カ月だけで，忠烈王がふたたび即位することになったが，これは王室の痴情問題も多分に関連しているが，忠烈・忠宣の両王をめぐる政治的謀略・中傷

の結果だと見られる。忠宣王が元に行った後にも，彼に怨みを抱く宋璘・宋邦英などが彼を陥れようと，忠烈・忠宣の間を離間させようとして，薊国大長公主再嫁を提起したが，逆に処刑された。忠宣王はふたたび即位するときまで10年のあいだ，薊国大長公主と元の都に留まって，後に武宗となる懐寧王ハイシャン（海山）および仁宗となる太子アユルバリパドラ（愛育黎抜力達）の兄弟と親しく交わった。1307年，皇帝の成宗が死ぬと，皇位継承が実力問題として悪化した際，忠宣王は武宗を擁立して功を立てた。これによって元の皇室との親分が篤くなり，瀋陽王に冊封され，高麗に対する実権も掌握するようになった。1308年，父王が死ぬと，寿寧宮で即位，ふたたび政治の刷新に熱意を見せたが，長く高麗に留まることなく，元での生活を楽しみ，伝旨を通して国政を行った。王が毎年のように多くの物品を元に持って行き，元に滞在を続けたので，王の帰国運動が起こったが，江陵大君・燾に王位を譲り（世子の鑑は忠宣王が殺した），寵愛していた甥の延安君・暠を瀋陽王の世子として後に彼に位を継がせることにして，最後まで帰国することを避けた。彼は，本国に対する愛着の欠如，元皇室の優待にも理由があるものの，本性として淡白で仏を愛し，文章を好み，絵を巧みに描くなど，政治と権力には愛着がすくなかった。元の都に万巻堂を設立して内外の書籍を収集，高麗から李斉賢などと元の趙孟頫などの学者を招聘して学問を研究，高麗への文化の輸入に努力した。元の仁宗が死ぬと，奸臣の讒訴でチベットに流されたが，泰定帝が即位すると赦されて元の都に戻り，二年後に死んだ。

この『国史大事典』は要領よくまとめられていて，わたくしなど日本人研究者にとっては漢字も使われているので，最近のより詳しい韓国精神文化研究院編『韓国人物大事典』（中央日報出版法人中央Ｍ＆Ｂ　1999）よ

りも重宝して使用しているのだが，今回だけはこの記述の最初のミスに振り回されてしまった。最初の生没年の1275（忠烈王１）～1314（忠粛王１）というのが間違いであり，忠宣王の死んだのは1325年（忠粛王12）のことである。王位を忠粛王にゆずって上王としての元での生活はさらに長かったのである。その期間に文人たちとの交際も濃密に行われたのだと考えられる。

文人の君主が存在する。あるいは esthète ということばがある。文化に理解を示すのは悪いことではないのだが，あまりに文事に没頭し過ぎて，政治的には無能であり，世の中を混乱に陥れて顧みない君主。人民にとっては迷惑この上ない存在であるが，その美意識は卓絶していて，芸術の庇護者となり，後の時代の美の価値基準を創造することもある。あの幻のように美しいノイシュヴァンシュタイン城を築き，ワーグナーのパトロンであったバイエルンのルードヴィヒⅡ世，そして日本においては室町幕府の八代将軍足利義政がそのような人であった。銀閣寺を作り，東山御物という茶器や絵画の収集を行い，その派手さを抑えた美意識は以後の日本の美の基準を創出したといってよい。政治的には無能であるというより，ほとんど政治には興味を示さずに，その結果，応仁の乱を引き起こし，以後，百年も打つ続く戦乱の世の中を招くことになる。しかし，日本研究者のドナルド・キーン氏は，日本的な美の創造者として足利義政ほど日本文化に貢献した人はいないと高い評価を彼に与えている（ちょうど今，2014年の秋，東京の三井記念美術館で「東山御物」の展覧会が行われている。宋の絵画のコレクションはすばらしく，また微細な蒔絵が施された一辺が５センチにも満たない香箱などを見るとき，足利義政の美意識には驚嘆するとともに，彼にとって政治などどうでもよく，民衆のことなど彼の頭には入り込む余地もなかったのだと確信した。「玩物喪志」などという戒めなどこの人の浸った美の世界では無意味である）。忠宣王は元に居住したが，

そこにつくった万巻堂を窓口として中国の文化や芸術が高麗に導入されたことは容易に想像される。それが高麗本国の文化の醸成にも大いに役立ったにちがいない。その時代の空気を呼吸して「楊柳観音像」は製作されていると考えてまちがいない。しかし，そう考えること自体，「国家」を脱ぎ棄てることのできない思考法に陥っていることなのかもしれない。日本的な仮名文字が「こま」の紙に書かれてもいいのである。忠宣王はすでに国家に捕らわれずに世界のステージにいるともいえる。母方をたどれば，彼にはモンゴルの血が濃厚に流れてもいるからというわけではなく，普遍的な文物と美の世界に生きているのである。

しかし，忠宣王は安閑とばかりして元の都で文人生活を堪能していたというわけでもないようである。『高麗史』世家巻三十四の記述をたどりながら，忠宣王の晩年を見てみよう。

（忠宣王）五年（1313）

三月甲寅，長子の江陵大君燾を以て帝に見えしめ，伝位を請ふ。帝，乃ち燾を策して王と為す。是の時，朝廷は王を帰国させんとし，王は以て辞を為すなく，其の位を遜る。又，姪の延安君暠を世子となす。王，嘗て瀋王に封ぜらるる故に，時に瀋王を称す。

元の朝廷は高麗の王が長く元の京に留まるべきではないと考えて，高麗に帰るようにうながしたが，忠宣王は帰国したくない。しかし，抗うことが難しくなって，忠宣王はついに王位を放棄するのである。また，忠宣王は瀋陽王でもあったが，そちらの世子には甥に当たる延安君暠を指名したという。こうして自由になった忠宣王は万巻堂に学者たちを集めて文人三昧の生活を送ったのである。そのときのエピソードが『高麗史』にもあり，李斉賢の『櫟翁稗説』にもある。

ある鮮卑族の僧侶が，皇帝の師匠である巴思八は蒙古文字を作って功績があったので，巴思八を孔子と同じように祭壇を作って祭るべきだと奏上した。それに対して，忠宣王は，文字を作ったというだけで巴思八を孔子並みに祭ったなら，後世になって笑われるであろうと，至極まっとうな意見を述べたというものである。武宗の即位に功績のあった忠宣王は元の宮廷でも一定の発言力をもっていた。

（忠粛王）三年（1316）三月辛亥，王，帝に奏し，瀋王の位を世子の暠に伝え，自ら大尉王と称す。

とあって，忠宣王は瀋陽王の位も煩わしくなって，甥の暠に譲ってしまう。

六年（1319）三月，帝に御香を下されんことを請うて，江浙に南遊し，宝陁山に至りて還る。権漢功・李斉賢らこれに従ふ。従臣に命じて，歴する所の山川勝景を記せしむ。行録一巻を為す。

1319年には，忠宣王は中国の南方に旅行した。元帝に授かった香を宝陁山の寺に献じるための旅行であったようである。李斉賢と権漢功がこれに従って，名文家の李斉賢がその紀行文を書いた。

七年（1320）四月，復た帝に香を江南に降されんことを請ふ。蓋し，時事まさに変異あらんと知りて，以て患を避けんとするなり。

しかし，翌年の四月には事態が一転する。前年の旅行は従臣の李斉賢に紀行文を書かせるほどの，少なくとも表面的にはのんびりした物見遊山であったのが，今回は香を寺に献じる名目で，これから何事かが起ころうと

する，その患を避けるためであったとする。

同六月，王，金山寺に行き至る。帝，使を遣はして急に召す。騎士をして擁逼せしめ，以て行く。侍従・臣僚，みな奔竄す。

六月に王が金山寺に至ったとき，皇帝は使いを派遣して王を捕縛させた。従って行った臣下たちは王を放ったらかしてみな逃げ散ったとある。金山寺というのは，四月に皇帝からいただいた香を献ずるためにやっとたどり着いた江南の寺であろう。元の京，および高麗の京で，忠宣王のいないあいだに何事かが起こっていたのである。今回の旅行はそれをうすうすと知った上での逃避行であったのだが，それでも難を逃れることはできなかった。

同九月，王，大都に還り至る。帝，中書省に命じ，本国に護送して安置せしめんとす。王，遅留し，顧望して，即ち発せず。

王は江南から連行されて，ようやく九月には元の京に着いた。皇帝は中書省に命じて，王を高麗に帰らせようとした。ところが，王はそれが嫌で，出発しようとはしない。このときの忠宣王の心の中を忖度するのはむずかしい。なぜ，高麗がいやなのか。繁華な元の京がそれほど気に入っているのか。あるいは，高麗に帰ったら，身の危険が待っているとでも思ったのだろうか。

同十月，帝，王を刑部に下す。既に祝髪して，これを石仏寺に置く。

十月には忠宣王の身柄は司直の手に委ねられることになったが，忠宣王は剃髪して，寺に置かれることとなった。

同十二月戊申，帝，王を吐蕃の撒思吉の地に流す。

忠宣王はついにチベット流されたことになる。
そして，三年後になって，ようやく赦される。

十年（1323）八月，泰定皇帝即位，大赦して，天下召還す。

そして，その二年後には死ぬのである。

十二年（1325）五月辛酉，王，燕邸にて薨ず。在位五年，寿は五十一。

繰り返すが，忠宣王は遂に高麗に帰ることがなかった。

四,「楊柳観音像」の意味

観音菩薩の利益については『法華経』二十八品の中の「観世音菩薩普門品」にくわしく説かれていて，それは独立して「観音経」として人びとに親しまれもした。日本では特にそうで，仏教の諸仏・諸菩薩の中で最も愛されたのは観音菩薩なのではなかろうか。わたしたち衆生の歎きの声を聴けば，それに大慈大悲の思いを生じてわたしたちを救ってくださる。そのときそのときのわたしたちの苦難の状況に応じて，仏，声聞，梵王以下の三十三の姿に変じて現れることになる。そのことで，日本には三十三間堂なるものがあり，また西国三十三ヵ所の観音霊場があったりするのだが，この同じ経典を読みながら，韓国では三十二の応身としたのがおもしろい（京都の知恩院に元は韓国の全羅南道の古刹道岬寺にあった「観世音菩薩三十二応身図」なる朝鮮仏画がある）。

ところが，高麗時代に多く描かれた「水月観音像」あるいは「楊柳観音

像」といわれるものは『華厳経』に基づいて描かれている。奈良の東大寺の大仏（毘盧遮那仏）も『華厳経』に基づいており，奈良時代にすでに日本にも入ってきているのだが，『華厳経』は日本よりもむしろ韓国において盛んに尊ばれた経典であり，特に新羅時代の元暁や義湘において華厳教学は高い達成を見せた。鎌倉時代の初めの明恵上人はこの新羅の高僧たちに深い影響を受け，彼の住持した高山寺には二人の事跡を描いた『華厳宗祖師縁起絵巻』が伝わっているのは周知のことである。華厳哲学は至極に難解であり，わたくしのこの経典に対する理解は充分ではない。哲学者の上山春平先生の解説（鎌田茂雄・上山春平『仏教の思想６　無限の世界観（華厳）』角川書店）を読んで，その「性起」の考え方や，「十字品」などの意味をぼんやりと理解したつもりでいる程度なのだが，今，必要なのは，善財童子の善知識をめぐっての遊行を描く「入法界品」である。

この童子は福城の長者の子で，誕生の際に無数の財宝を生じさせて蔵々を満たした，それが名前の由来になる。彼は清浄無垢の心をもって過去の諸仏を供養していたところ，文殊菩薩の説法に感動し，悟りの道を尋ねる。すると，文殊菩薩は，悟りを得るためには菩薩の行を修めなくてはならず，そのためには真の善知識を尋ねて修行の方法を教えてもらわなければならないというのである。そこで，善財童子は，諸菩薩・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷，さらには外道など五十三か所，五十四人の善知識に会うことになる。「入法界品」は遊行，つまり旅を語る。江戸時代，日本の東海道には五十三の宿場町が定められたが，これも『華厳経』「入法界品」によっているとすれば，古人たちは旅に一種宗教的な心の浄化を感じていたのである。

観音菩薩に出会うのは二十八番目のことであり，二十七番目の鞞瑟胝羅居士に補怛洛伽山にいる観音菩薩のところに行くように勧められて赴くのである。これまで出会った居士や菩薩や諸仏の教えや行いや解脱のありさ

まに思いを凝らしながら，「漸次に遊行して」，ようやく彼の山に至り，所々に観音大菩薩を探し求める。そして探し当てた。『国訳一切経　華厳部』（大東出版社）を少し引用してみよう。

其の西面の巌谷の中を見るに，泉流瑩映し樹林蓊鬱し香草柔軟にして右に旋りて地に布き，観自在菩薩は金剛宝石の上に結跏趺座したまひ，無量の菩薩は皆宝石に坐して恭敬して囲遶し為に大慈悲の法を宣説して其をして一切の衆生を摂受せしむ。

観音菩薩はダイアモンドの上に結跏趺座して，それを囲んで宝石の上に座っている菩薩たちに大慈悲の法を説いていたのである。善財はそれを見て，歓喜踊躍し合掌し，瞬きもせず，この善知識こそが一切の法雲であり，諸々の功徳蔵であり，智海の導師であり，一切智に至る助道の具であると考えて，近づいて行く。

爾の時に観自在菩薩は遥かに善財を見て告げて言はく，善く来れり，汝大乗の意を発して普く衆生を摂し，正直の心を起して専ら仏法を求め，大悲深重にして一切を救護し，普賢の妙行は相続して現前し，大願は深心に円満清浄にして，仏法を欣求して悉く能く領受し，善根を積集して恒に厭足無く，善知識に順じて其の教に違はず，文殊師利の功徳智慧の大海より生ずる所たり，其の心成熟して仏の勢力を得，已に広大の三昧の光明を獲て意を専らにして甚深の妙法を希求し，常に諸仏を見たてまつりて大歓喜を生じ，智慧清浄なること猶虚空の如く，既に自ら明了にして復他の為に説き，如来の智慧光明に安住せりと。

遠く補陀落までやって来た善財童子を見て，観音菩薩は歓迎し，大乗の

意志を発して甚深の法を求める心構えを褒め称える。しかし，善財童子は，まだ菩薩はどのように菩薩の行を学び，どのように菩薩の道を修したか知らない，観音菩薩よ，わたしのためにそれを説いてくださいと懇願する。それに対して，観音菩薩は自己の大悲の行を説くことになる。

善財童子の補陀落での観音菩薩との出会いは感動的な場面であり，それがモチーフの工夫を加えて「楊柳観音像」になるわけであるが，実をいえば，忠宣王自身が補陀落に行っているのである。くりかえし，引用する。忠粛王六年（1319）のことであった。

> 三月，帝に御香を下されんことを請うて，江浙に南遊し，宝陁山に至りて還る。権漢功・李斉賢らこれに従ふ。従臣に命じて，歴する所の山川勝景を記せしむ。行録一巻を為す。

宝陁山というのは普陀山であるにちがいない。浙江省は観音信仰の聖地であり，寧波沖の舟山群島の中の一つである普陀山は観音菩薩の居所である補陀落であると考えられていた。2009年，奈良国立博物館で「聖地 寧波 日本仏教1300年の源流」なる特別展が行われたのを記憶している。今あらためてその図録を見ると，長野県定勝寺の所蔵する「普陀落山聖境図」がこの特別展では展示されていたようである。上空の雲の上には中央に観音菩薩がいまし，向って左に月蓋長者，右には善財童子が描かれている。その下には山々が囲繞する中央に宝陀寺の大きな伽藍が描かれ，さらにその下方の右には潮音洞があって今しも観音菩薩が顕現し，小さな善財洞もあって善財童子も描かれ，人々が礼拝している。いちばん右上には太陽が描かれ，「東至耽羅日本国黒水大洋」とあり，韓国と日本も意識して作図されたものであり，さらにいちばんの左下には沈家門という門前町まで描かれる。元時代の寧波沖の普陀山を描いた図なのである。日本では中世の

長い期間，和歌山県の南端の那智から何日間かの食糧を積んだだけの小舟に乗って，僧侶たちが観音の浄土を求めての補陀落渡海を行った。現代の感覚からいえば，それはただの自殺行なのだが，忠宣王は生きながらに浙江省の「補陀落」まで遊行して観音菩薩に出会うことができたのである。そこでは忠宣王は善財童子の立場なのであるが，しかし，鏡神社の「楊柳観音像」では，むしろ観音菩薩の立場になるのかもしれない。なぜなら，高麗からはずっと離れた異国の土地にいましたからである。

至大三年（1310）五月に淑妃金氏によって製作された「楊柳観音像」は元の都にいる忠宣王を忍ぶ心が製作の動機として潜んでいるであろう。淑妃は善財童子のように遊行してでも忠宣王を訪ねて行きたいと思っている。しかし，この絵画はまた，以後もずっと高麗に帰ることはなく，元に留まることになった忠宣王の未来を予告することにもなってしまう。さらには，1320年には忠宣王はそれこそ補陀落宮のあるチベットに流されることにもなるというような因縁話は慎むべきであろうか。

最後に一言付け加えておきたい。製作年については伊能忠敬のメモに従うしかないのだが，傷んでいてその部分が今は除かれたのだとすれば，もともと読み取りにくい文字だったもので，「至大三年」ではなく，あるいは「至治三年（1323）」という可能性はないのだろうか。その五月には，忠宣王はまだチベットの流謫の地にいた。元の大都に呼び戻されたのは，八月に元の皇帝の英宗が殺害されるという事件があり，泰定帝が即位して後のことである。しかし，この画の製作にあまりに劇的な背景を想像するのは慎もう。そう考えなくとも，はるか遠くにいる王を欽慕する当時の高麗の宮廷の空気を充分に呼吸した作品であることは確かだと思う。